文久２(1862)年の麻疹流行に伴う麻疹絵の出版とその位置づけ

加　藤　光　男

はじめに

時事や世相を取材し作成された浮世絵[1]（以下「時事浮世絵」と略称表記する）を対象とした研究は、今日ひとつの到達点に達したといえる[2]。

まず、南　和男氏[3]の一連の研究により、小西四郎氏などが提示した個々の「時事浮世絵」がどのような社会背景のもとに生み出されたものであるのか明らかになり、そして鯰絵や麻疹絵などの「時事浮世絵」について代表的な作品を示し、資料の特色を概観された。その後、拙稿により、天保期から明治初年の新聞錦絵の終焉にいたるまでの「時事浮世絵」の流れを確認し、また「時事浮世絵」を作成した絵師や板元を一覧化することによって、南氏の研究成果を受けて、幕末から明治初年にかけての浮世絵の動向のなかで、「時事浮世絵」の位置づけ・意味づけがなされ、枠組みが提示されたのである。

個別研究については、個々の「時事浮世絵」を作成順に列べ、世の中の動向や人々の思いが、いかに反映されているものなのか、テキスト分析の作業がなされている。私自身もこの基礎作業の重要性を感じ、嘉永２（1849）年の流行仏絵、安政２（1855）年の鯰絵などを対象とし考察してきた。また、浮世絵における異版の存在、モチーフや板木の流用など、浮世絵を歴史資料として分析する際の留意点や資料批判の必要性についても私見を述べてきた。

一方、今後も落穂拾いのように情報が付け加えられていくものと思われるが、既に、流行仏絵、鯰絵、麻疹絵、戊辰戦争時の子供遊絵や大人戯絵、拳絵などの作品一覧が提示されている[4]。

以上の成果を踏まえて、今後、「時事浮世絵」に関する研究は、個々の作品群が時間経過のなかで内容がどのように変化していくのかという前述の視点から、麻疹絵のように従来対象とされてこなかった作品群を分析することも必要ではあるが、新たな視点で考察を深めていかなければ質的な向上は望めない。つまり、これまでの研究が、テキストの内容分析や解釈、そして作品の集成に限定されおり、この点から脱却し、新たな視点を模索し乗り越えていかねばならないのである。

このことに対し、私は、新たな視点のひとつとして、「時事浮世絵」がいかなる要望によって作成されたものなのか、またどのように流通していたのかという点に注目しなければならないと考えている。従来、この視点による検討が行われなかった理由は、作品が存在していても、浮世絵愛好家が明治以降に収集したものであったり、博物館等においても美術商等からの購入やコレクターからの寄贈によって成立したコレクションであったことから、作品に纏わる来歴情報を得ることができなかったことによる。

そこで、本稿は、当文書館に収蔵されている小室家文書のなかから、「時事浮世絵」のひとつである麻疹絵が、北武蔵の村落にどのような形で伝播していたのか、そして入手者はどのような情報を求め、板元はどのように対応したのか明らかにすることを主要な課題とし、あわせて麻疹絵の特色をも言及することにより、今日の研究水準の克服を試みる。

麻疹絵は、江戸において文久２（1862）年４月にはじまり７月に隆盛を極めた麻疹の流行[5]に合わせて、４月と７月に多数作られた麻疹対策の情報や流行当時の世相を盛り込んだ浮世絵である。

麻疹絵に関する本格的な研究は、南　和男氏により先鞭がなされ[6]、H・O・ローテルムンド氏により民俗学的な視点から麻疹絵の持つ呪術性についての言及[7]、藤井祐之氏による疱瘡絵と麻疹絵との比較検討[8]がなされている。私自身も「時事浮世絵」の中での位置づけと、モチーフの流用について明らかにしてきた[9]。そして、富沢達三氏の報告（2001年10月29日）によって、麻疹絵の持つ速報性、４月と７月の麻疹絵の画題の変化などについて言及がなされている[10]。一方、麻疹絵を集成した図録も数度刊行されている[11]。

１　番匠村の小室家に伝えられた麻疹絵

小室氏は、享保７（1722）年、病気平癒のため鎌

倉から武蔵国高麗郡高麗本郷村に蘭医として招かれ、享保10年に比企郡番匠村（現．比企郡都幾川村番匠）に来村したと伝えられている。小室家は代々医師を家業としており、文久２（1862）年当時、元長（当時41歳）が安政５（1858）年の父元貞の死去に伴い家督を継いで、種痘治療や産術などの医療活動をおこなっていた。元長は、文久元（1861）年３月、それまで勤めていた番匠村名主後見役を退役するが、この後も村の有力者として領主や地方役人との関係が明治維新まで続いたことが確認される[12]。

小室家には、文久２年４月に江戸の月行事により検閲を受けた麻疹絵として、房種画「麻疹軽くする法」（NO. 1・この番号は、64～66ページ所収の表１の作品番号に一致する。以下同じ）、貞秀画「麻疹養生伝」（NO. 4）、貞秀画「痘瘡・麻疹・水痘」（NO. 5）と、同年７月に江戸の月行事により検閲を受けた麻疹絵として、房種画「麻疹養生之おしへ」（NO. 37）、芳虎画「麻疹養生心得方」（NO. 41）、芳藤画「はしか童子退治図」（NO. 62）、艶政画「麻疹厄はらひ」（NO. 76）、以上７点が残されている[13]。

これらの麻疹絵は、巻子に仕立てられ、その順番は、NO. 41・5・4・37・1・76・62となっており、四月・七月改めの区別がなされずに貼り継がれている（なお、麻疹絵の後には、文久３（1863）年の江戸市中混乱時のあわて絵などが貼り継がれている）。

小室家には、代々の日記が残されており、文久２年の日記も残存するが、麻疹の流行や麻疹絵の購入に関する記述はない。また、現状の貼継の順番と入手の順番との関係、入手時期や入手の動機、入手方法や価格などが明らかとなる資料はない。

まず、それぞれの麻疹絵に盛り込まれた情報を明らかにしてみよう（なお今回は、全文翻刻に際し、漢字に付された読み仮名の記載は割愛している）。

NO. 1「麻疹を軽くする法」（写真１）には、順に、①麻疹に対する民間薬として「一節分の夜門にさしたる柊の葉を三十三軒にて一枚ツヽもらひあつめ、せんしてはしかせぬ小児に呑すべし、かろくしてわさわひなし」、②呪符として「多羅樹葉一枚とり、麦殿は生まれたまゝにはしかして　かせたるのちハ我ミなりけり　といふ歌をかき、はしかせぬ小ともの名と年をかきて川に流すへし、かならすかろく余病もいてす」、③食べてはいけない物「毒だて」として、「魚るい　鳥るい　竹の子　きの子るい　あぶらげ　すのもの　めんるい　くだもの　なすび　玉子　そらまめ　なたまめ　梅つけ　粕つけ　五十日忌べし　慎されバよどくいでゝ難病となる」、④慎むべき行為として「房事ハ殊いむへし」の文字情報と、視覚化した麻疹の病原に囲まれた患者の男を診断する医師の姿が絵画情報で示されている。

写真１　麻疹を軽くする法

NO. 4「麻疹養生伝」（写真２）には、①麻疹よけの三文字「籠蘢乙」の呪符について「此三字を書て家のうちに貼おけバきハめてはしかかろし、故にこの画中にしるす、西国にてハ昔よりこの符によりてこれをまぬかれ、又ハかろくすると云云」、②これまでに麻疹の流行った時期や③一度罹れば二度と罹らないこととして「日本書記に曰く、敏達天皇四十年四十年、此症はじまり、上ハ百官・下万民に至るまで死傷多しと云、或書に疱瘡ハ聖武天皇天平七年はじめて流行し、麻疹は同九年にはじめてはやる、そののち桓武帝延暦九年まで其間五十四年めにして流行し、又二百十九年め長徳四年に流行り、また四百七十四年めにあたり文明三年に流行す、年数遙遠なれバさだめて其内に麻疹はやるともしらず、病たる人多く有べし、文明より三十七年め永正四年にまたおこなハれ、そのゝち百四十四年め慶安三年にはやり、また四十二年めにして流行し是元禄三年なり、又四十年め享保十五年めにはやり、二十四年の後宝暦三年流行、また二十年め安永五年おこなハれ、そのゝち二十八年め享和三年にはやり、凡天平より享和まで一千七十六年の間数度の流行にして、しかも生涯一度病て二度病ことなきハ一ツの異なり、享和より二十二年め天保七申年流行、夫より廿七年目にて、当戌年海内に流行す」、④麻疹の際に「食して宜しきもの」として「一やき塩　一かんぴやう　一ほし大根　一ゆりの根　一にんじん　一かたくり　一古ミそづけ　一上葛　一くろ豆　一氷こ

んにやく　一越瓜　一冬瓜　一隠元豆　一十六さゝげ　一鹿角菜　一小豆　一やえなり　一水飴　一白雪羹　一麩 酒はあしく　一鮑 酢貝にてハあしく」という文字情報と、絵双紙を読んで療養する女性の姿が絵画情報で示されている。

写真２　麻疹養生伝

NO. 5「痘瘡・麻疹・水痘」（写真３）には、①麻疹は一生の大厄であることや②麻疹の症状について「人間一世の大厄なれども其かろきに至りてハ服薬をも用ひずして治する其中に、稍はげしく熱毒さかんに足腰たゝず、人事を失ひ夢中の如くなるも有り」、③療養方法について「然れども養生をよく専らにする人ハ第一食物を用捨して、おのづから全快に至る、はじめ熱有と思ハヾよく風にあたらぬやう蚊帳又ハ紙帳を用て日中も其内に居るべく、冷かなるものを食せず、渇くとも水を呑こと大にわろし、白かゆ又ハ白湯漬寒晒の粉道明寺の粉など食すべし、大人ハ其心を得れども幼稚ものハわきまへもなくくるしきまゝに夜着をふミぬき手足を出し冷るをかまハざるものなれバ看病人よくよく心附て介抱第一なり」、④「食して悪しきもの」として「一鳥類一切　一玉子 百日いむ　一青物油物ハ七十五日いむべし　一豆腐　一こんにやく　一そら豆　一竹の子　一餅　一梅ぼし　一麺るい うんどんハよろし　一梅漬　一柿　一菌るい　一もミうり　一茄子の生漬 百日いむべし」、⑤慎むべき行為として「肥立かゝりて怒こと忌べし、又哀事すべて気をつかふ事をまぎらせんと雑談又ハ草双紙などよミてたいくつせぬことよろし、結髪月代を剃こと大ひにあしく、廿日又ハ三十日も過てざつと洗足し、髪ハたばねておき十日ほど見あハせ其後沐浴髪月代してよろし」という文字情報と、生け花をする男性・走馬燈で遊ぶ子供の姿（養生図）が絵画情報で示されている。

写真３　痘瘡・麻疹・水痘

NO. 37「麻疹養生之おしへ」（写真４）には、①麻疹は一生の大厄であるとして「文久二壬戌年夏秋麻疹流行する事莫大にして、家々商売を休ミ枕を双打臥こといく千人といふかつを知らす、げに人間一世の大厄なり」、②麻疹の症状と療養の方法について「初日より気分あしく、さむけ・づゝう強く、ねつきおびたゝしく、水を好事しきり、決て呑すべからず、三日目位にして発す、四五日絶食なり、必しんはいするに及ず、十日ヨリ十二日にして全快する也、熱強きゆへはら下るともかまひなし、全快の後ハ養生専一なり、風に吹れぬよふにして、かるはづみすへからす、慎ミ深けれハ無病長寿疑なし」、③「食してよき物」として「一麦・あつき・さとう・ミそづけ・しら玉　一ほしうんどん・かんひやう・かたくり・びわ　一さつまいも・れんこん・きりほし・なかいも　一とうか・いんけん・ふるたくわん・なし　一ひじき・あらめ・こぶ・ぜんまい・くわへ　一にんじん・はくせつろう・しろうり・くす・一いんげんまめ・やへなり・かつをぶし・ゆりのね　一あわび・きす・かなかしら・さより・むしかれい　魚類ハ日かづ十五日もたちて先ハよし」、④慎むべき行為⑤「食してあしきもの」として「一房事七十五日・入湯七十五日・灸治七十五日　一そば七十五日・髪月代五十日・酒七十五日　一川魚・梅干・ご

ぼう・唐なす・茄子瓜　一そら豆・さといも・ぬかミそ・からきもの・干のり　一ほうれんそう・ねぎ・もろこし・こんにやく　一しいたけ・なたまめ・くだもの・きのこ　一すのもの・玉子・かすづけ・めんるい・油こきもの一切わろし」という文字情報と、療養する花魁と看病する禿と、見舞いの品を持参した麻疹の姿が絵画情報で示されている。

写真４　麻疹養生のおしへ

NO. 41「麻疹養生心得方」（写真５）には、①麻疹の症状の経過として「一此度麻疹流行いたす事広大にして、其中にも種々重軽ありて、先かるきハ、初日にすこしさむけありて引風のこゝちにて、二日目に少し気分あしく相成、三日目にいたり薄赤く発す也、当年のハ夏気ゆへ腹下り、熱あり候共さしかまい無之、五日六日目位にしてかせる也、八日九日目にして全快す、かるきゆへ養生あしわ必ず再発いたし重くなる也、食事を能く心付風にふかれぬ様大事にいたすべし」、②「食してよき物」として「○ゆり○冬瓜○黒豆○永いも○かんひよう○さつまいも○大根○ねんじん○十六さゝげ○小豆○牛房○白瓜○麦○切干○瓜塩押○古沢庵○うんどん○麩○やきふ○飴○ゆば○氷こんにやく○かたくり○くず○かつほぶし○しんこ物○らくがん○さとう○やきだんご○水飴○昆布○わかめ○荒布○ひじき○とぜう○あわび○きんこ○さより○かれい○はも○かなかしら○あいなめ○こち○しゞめ○ミそ汁○ぶどう」、③麻疹に効く薬について「一名弁麻葛根湯　麻瘡良薬法　△葛根　三匁　△外麻　二匁　△葛薬　二匁　△甘草　二匁　右四味調合して、生姜入水一ぱい半入、せんじ用ゆべし　○内攻の大妙薬　△穿山甲　△牡蠣　此二味火にてやき　△紅花　△川芎　△大黄　△甘草　右六味せんじ用ゆべし　○はしか目に入たる時の妙薬　△せついんの虫を二ツにさきて其汁を目の中へさして宜　○かゆミをとめる妙薬　△黒豆　△陳皮　△大麦　△甘草　△生姜　右五味せんじ用ゆ」、④麻疹の症状と養生について「一先初日よりさむけいたし、又者熱いてづゝういたし、寝びゑかく乱なぞと心得違ひ致すと一大事也、薬相違の無之様、能々心付医師にかけべし、二日目三日目頃より気分追々あしく、五六日目には絶食に相成おゝいにくるしむ共、余病なくんば心配無之、此時手おくれにならざる内良薬を用ひべし、八日九日目位にして青薄黒くいでる也、十六日目位にしてかせるなり、養生能々心付食物のよしあしを気を付くわすべし、廿日位にして全快す、ぜんくわいの後風にあたらぬ様養生専一にすべし、養生あしく食物なそにて再発致候得者命危し」、⑤「食してあしき物」として「○梅干○しい茸○干海苔○水菓子○素麺○ぬかみそ○油気○川魚○貝るい○酢き物○餅るい○ほうれん草○粟○里芋○ずいき○蓮根○菜○やつかしら○もろこし○くわい○ねぎ○木瓜○芹○ゑんどう豆○空豆○桃○根芋○白豆○ぜんまい○とうなす○豆腐○こんにやく○いんげん豆○新梨子○大角豆○からき物○栗○柿○蛸○うなぎ○玉子○するめ○ゑび○蛤○たばこ○なた豆大毒なり壱年忌べし○そば七十五日○酒七十五日」、⑥慎むべき行為として「○房事七十五日○入湯かるきわ三十日おもきわ五十日○月代五十日○灸治五十日」、⑦「麻疹まじなひ奇薬」として「△きんこを塩あまく煮付くわすべし、咽へできぬ事妙也、△麦わらにかわらよもき二種をせんじのますバ山あげるなり、△糸柳を千一足切せ

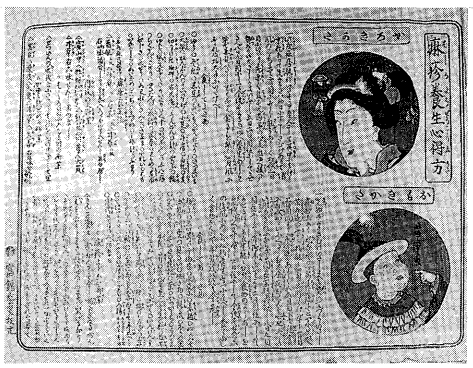

写真５　麻疹養生心得方

んじのますれは山あげる事妙なり　△おかぜりをせんじきよう水をつかわすればかるくする也　△せつぶんの柊の葉を七枚せんじのますれバ必ずかるい也、△発しぬ時ハ牛房十粒斗のますべし、さいかくを用ゆもよろし、此外種々あれ共紙すかぎれば略す」という文字情報と、麻疹の「かろきかた」と「おもきかた」の発疹の症状が絵画情報で示されている。

NO. 62「はしか童子退治図」（写真６）には、①「第一に忌べき事　一男女交合」、②食べてはいけない食物として「一魚鳥一切　一酒酢　一油気一切　一しん漬類」、③食べて「よろしきもの」として「一冬瓜　一ゆり　一かんひやう　一さつまいも　一黒豆　一大麦　一ぜんまい　此外能毒の書多く出し故に略之」という文字情報と、素盞烏尊（疱瘡神の守護神でもある）の指示のもと、顔や身体に赤い発疹のある麻疹童子を馬屋の盥・角樽・屋形船などが大数珠を用いて取り押さえようとし、薬袋がこれを制止しようとする姿が絵画情報で示されている。馬屋の盥を被ると麻疹よけになるといわれていたので、盥が麻疹退治に一役買っている。しかし、この画で伝えたい情報の本質は、麻疹流行時に酒を飲んではならないといわれ売上げが落ちた酒屋や、客の来なくなった屋形船屋が商売が成り立たなくなったことから麻疹退治を望んでいたのに対し、薬屋は儲けたため麻疹の流行を今後も期待しているという立場の違った人々の心情を、物品に仮託して代弁させた世相風刺である。従来この麻疹絵は、呪札の役割を持つと評価されているが、私は、麻疹よけの呪符ではなく、世相を描いた風刺画であると評価する。

NO. 76「麻疹厄はらひ」（写真７）には、①「厄払い」の台詞を借りて「アヽラ、うるさいな、うるさいな。当時はしかの流行を。神のちからではらひませう。一夜あくれバお顔にぽつちりできぼしや。よなミハよろづよしあしの。せけんいちめん床のうへ。おもきまくらのはつゆめに。いちどにねたらみんなふし。旦那おたくをながむれバ。あかき頭巾のつるがしら。見まひにくれた水あめの。瓶ハまんねん御寿命を。いハふて、かるやき。ゆば。やきふ。医者の匕さき口さきも。かるく見たてるそのなかへ。例のはしかのしり馬に。のりこむねつや疫病が。さまたげなさんとするところを。伊勢の神風ふくハ内。お庭外へとつまミだし。ちくらが沖へさらり、さらり」と世相を風刺し、②上から読んでも下から読んでも同じという廻文歌「長き世の遠の眠りのみな目覚め　波のり船の音のよきかな」を元歌として世相風刺の歌として「ながき日のとこのねむりのミな月に　このごろはしか世なミよきかな」、③「食してあしきもの」として「一冷物　一生物　一五辛　ねぎ・にら・くさきもの・からきもの　一果物　もゝ・なし・びわ・ぶどうのるい　一酢酒　一はちみつ　一砂糖　一あぶらげ　一めんるい　一いりたるもの　一木の子竹の子るい　一もち米しんこもちのるい　一ちさ　一せり　一しんぎく　一わらび　一きうり　一なす　一とうなす　一魚鳥　一貝るい

写真６　はしか童子退治図

写真７　麻疹厄はらひ

一玉子　一塩からきもの　一塩魚　一ほうれん草　一青くさきもの　一こんにやく　ならづけのるい　ぬかミそづけのるい　すべて多く食ふハよろしからす」という文字情報と、厄はらいに扮した麻疹を退治する素盞烏尊が絵画情報で示されている。

以上紹介した小室氏が入手した麻疹絵７点から得られる情報を、重複内容の多い順に列べると、①麻疹流行時に食してはならない食品（６点）、②慎むべき行為（５点）、③食してよい食品（４点）、④麻疹の症状と養生の方法（３点）、⑤麻疹の前兆および一度罹れば二度と罹らないこと・一生に一度の大厄（３点）、⑥麻疹に対する薬の調合方法（１点）、⑦麻疹の流行した時期（１点）、⑧三文字の呪符（１点）、⑨多羅樹に呪文を書く厄よけ方法（１点）となる。

なお小室家には、天保７(1836) 年における麻疹流行以前、天保５年に入手した文政７(1824) 年正月刊行の板本・葛飾芦庵翁選「麻疹必用　一名痘疹年代記　全壱冊」37丁・以下「麻疹必用」と略記する）[14] がある。「麻疹必用」の表表紙には、「天保五午年後孫小室求馬江贈ル生涯ノ心得也、治術ハ寒熱ヲ瀉ニ不及也、他ニ求ン哉　延羽老人□記」と、祖父元長（３代）による筆書きによる記載がある。つまり、小室元長（５代）は、文久２年の麻疹流行時に、麻疹に関する情報を手元にある板本から入手できる状態にあったのである。

「麻疹必用」の内容・構成をみておこう。

この板本の内容は、順に、ⅰ古代から文政７年までの麻疹や疱瘡が流行した時期と流行の概要（11丁）、ⅱ麻疹にかかった際の発疹症状絵図４点（２丁）、ⅲ麻疹の症状に関する解説（３丁半）、ⅳ麻疹予防として身の回りを清潔にする事（１丁・絵図２点あり）、ⅴ「麻疹の五忌」として「汚穢不浄をいむ」・「葷腥冷風寒をいむ」・「はしかの初め発熱の時に寒涼の薬を用ることを忌」・「はしか初起発熱の時に辛熱の薬を誤用ることを忌」・「はしかの初め自ら利するも多く是を誤りて補渋の薬を用こと甚忌」（１丁半）、ⅵ麻疹に罹った際の療養方法や慎むべき行為として「はしか発熱の時、外ハ風寒にあたり、内は生物冷物の類を食するなかれ」など（３丁）、ⅶ「麻疹の異名」（半丁）、ⅷ麻疹薬方（１丁半）、ⅸ「麻疹来んとする時予め用心の妙法」（＝呪い）として「多羅葉といふ木の葉を採、左之通り［「むぎどのハ生れたまゝにはしかして　かせての後ハわか身なりけり］の古葉を書、其人の年と姓名を書付、惣身をなでゝ河へ流すべし、此葉を書て、からた中をなでさすりて流せハ、必ずはしかをのかるゝといふ、又やむとも至て軽きこと妙なり」など（半丁）、ⅹ「麻疹ニ食してよきもの」として「みそ汁・大根・人参・牛蒡・葛粉」など（半丁）、ⅺ「禁忌の物」として「胡瓜・筍・南瓜・ひじき・豆腐・鯖・鴨・山鳥」など（１丁）、（以上、26丁）が記されている。

この後は、疱瘡についての記述［「疱瘡濫觴」・「痘瘡の異名」・「痘瘡戒の事」・「疱瘡を看法」・「穢気不浄を避る事」・疱瘡の定日」・「痘瘡神を祭の式」・「酒湯の仕方」・「痘瘡中食して好物」・「禁忌物」］（８丁半）と、水痘についての記述（１丁半）と不如帰や兎を食することの勧め（１丁）、奥付（１丁）が記載されている。

このような、内容をもった「麻疹必用」を、小室元長は所持していたのであるが、先の麻疹絵７点を新たに入手したことになる。

小室氏が既に所持していた「麻疹必用」に記載されている内容と、新たに入手した麻疹絵７枚に記載された内容を比較検討すると以下のようになる。

一致する項目として、ⅰの麻疹の流行した時期、ⅱ麻疹に罹った際の発疹症状図、ⅲ麻疹の症状、ⅵ麻疹に罹った際の療養方法や慎むべき行為、ⅷ麻疹薬方、ⅸ麻疹流行時の呪い、ⅹ麻疹の際食してよいもの、ⅺ食して悪いもので11項目のうち８項目であった。このうち、麻疹絵７枚からの方が得られる情報量が多いものは、麻疹流行時に食べてよい食品と悪い食品の品数であった。逆に、小室氏が入手していた麻疹絵になかった情報は、ⅳ予防法として身の回りを清潔にしておくこと、ⅴ冷風寒をいむを除く「麻疹の五忌」、ⅶ麻疹の異名であった。

小結

蘭医の小室元長は、文久２年の麻疹の流行時に、既に所持していた文政７年刊行の板本「麻疹必用」から療治方法などの情報を得ることができたにもかかわらず、麻疹絵７点を入手している。そして、麻疹絵に記載された情報の内容や水準は、医療情報については「麻疹必用」を越えるものではなかった。

また、麻疹絵は、巻子装になって残された。なお、巻子装にする場合は、揃物（＝シリーズ物）を除いて、興味のあるものから順に貼り継いでいくことが一般的である。それは、巻子にすると見たい資料にたどりつくまで資料を巻きながら検索しなければな

らないからである。この原則が、小室家の場合にもあてはまると想定し、改めて麻疹絵の貼り継がれた順番をみると、N041・5・4・37・1・76・62の順であった。これは、薬の調合も記され麻疹に対する治療情報が一番多い「麻疹養生心得方」にはじまり、「痘瘡・麻疹・水痘」・「麻疹養生伝」・「麻疹養生之おしえ」・「麻疹を軽くする法」と続き、その後に、食して悪しきものの情報も掲載されているが麻疹の流行を風刺した「麻疹厄はらひ」、そして麻疹の病原を退治する図柄で世相を風刺した「はしか童子退治図」が最後になっていることが明らかとなる。

このことから蘭医の小室家において、麻疹絵の入手の理由は、食べてはいけない品、慎むべき行為、食べてよい品、養生方法といった実用情報に関心があったことがうかがえる。他方、呪札・厄よけ札としての呪術的な効用についての情報の入手を主眼としていなかったと推察される。

2　野中家に残された「麻疹養生伝」

「麻疹必用」と同様な板本として、当文書館には、天保7から8年にかけての麻疹流行時に武蔵国幡羅郡中奈良村（現. 熊谷市中奈良）の名主野中氏が入手した文政7年刊行の板本・重田貞一（＝十返舎一九）著「麻疹養生記」（14丁）[15] がある。なお、野中家には、文久2年の麻疹絵は残されていない。

まず、小室家が入手した情報と比較するため、「麻疹養生記」の内容構成を明らかにしよう。

表表紙見返には、A麻疹よけの神としての鍾馗のいわれと鍾馗の画像が記してある。次に、刊行にあたっての序文として「麻疹養生伝序」（半丁）、B「麻疹之来由」として麻疹が推古天皇の治世時に大陸からもたらされたこと（1丁）。C麻疹の症状と養生の方法として「（前略）はじめ熱ありと思ハヾ、よく風にあたらざるやう温に打ふし、決してひやゝかなるものを食せず、かわけバとて水を呑と至てあくし、とかく白かゆ・かたゆ漬あるひハ寒ざらしの粉・どうミやうじなと食すべし（後略）」など（1丁）。D「食物よろしきもの」として「○ やき塩 ○かんひよう ○ほし大根 ○ゆりの根（以下略）」（半丁）、E食べてはならないものとして「（前略）○果ものあくし　其内梨子少しばかりハよし、去ながらくハざるにしくハなし　○魚類　きす　あいなめ（以下略）」（1丁半）。F慎むべき行為として「肥だちかゝりて、腹たつこと、かなしむこと、すべて気をつかふことあしく、只人と雑談をなし、草紙などよみて、退屈せざるよし、（中略）○房事ハ殊につゝしむべし（以下略）」（半丁）。G「麻疹まじなひの事」として「三豆湯或ハ馬屋の盥をかぶれバきハめて麻疹かろしなど、其外さまざま流布す（以下略）」（半丁）。H三文字の呪文字の札として「先年長崎の人より書付越したる奇妙の一符あり、因にこれをしるす　籙蘄乙　此三字をかきて家のうちにはりおけば、きハめてはしかかろしといへり（以下略）」（1丁半）。I麻疹の流行した時期を示した「麻疹年数大概」として「（前略）凡天平より享和三年まで千七十六年の間、数度の流行にして、しかも生涯一たび病てふたゝび病ざるも、亦一異なり、猶享和三年より当文政七年まで二十一年目にあたる」（2丁）。J「麻疹薬方」として「○升麻葛根湯　葛根三匁　升麻・芍薬・甘草各□匁　右調じ合せ、生姜を入、煎じ服す（以下略）」など（2丁）、K麻疹の前兆および麻疹は一度かかれば二度は罹らないこと（1丁）。L筆者が享和3（1803）年の麻疹流行の際の旅先での見聞（1丁半）、奥付（半丁）が記されている。

小室氏が所持していた「麻疹必用」と比較すると、重複する内容は、C麻疹の症状と養生の方法、D食してよい物、E食してあしき物、F慎むべき行為、G麻疹流行時の呪い、I麻疹の流行した年代記、J麻疹の薬方、K麻疹は一度罹ると二度とかからないであった。

次に、野中氏が、入手したかった情報が何であったのか、「麻疹養生記」における加筆部分から確認ておこう。加筆部分は大きく2か所である。1か所は、麻疹の流行を記した箇所である。ここでは、江戸時代に麻疹が流行した年の干支（60年一周期）が（本文）「慶安三年」に（加筆「庚寅」）などと記されるほか、「文政七年より天保七丙申年迄十二年目ニ当ル、同八丁酉年ニ至ル」と、文政7年の板本後の麻疹の流行した時期が追記されている。これは麻疹が一定の周期で流行することが経験的に認識されており、過去の流行時期を知ることにより次回の流行を予測しようとする意図があったと推察される。

もうひとつは、裏表紙見返しに、以下の文言が追記されている。

平癒之後食シテ宜品

一牛蒡　一にんじん　一山芋　一干ひやう

一ふき　一麩　一赤豆　一黒豆　一ゆり

一くわい　一大根　一さつま芋
　禁物
一風ニ当ル事　一冷ル事　一冷もの
一くさびら　一くだもの　一酒并粕漬
一酢并酢ノ物　一茄子　一油気類　一貝るい
一笋　一渋気類　一魚鳥類　一くさき類のもの
一塩からき物　一なか豆　一蜂ミつ　一そば類
　以上
天保七丙申年秋より流行、同八丁酉年三月終ル
疱瘡同前ニ万事を禁る事よし
　　矢野玄英ヨリ給ふ

食べてもよい食品や悪い食品についての情報は、本文中にも麻疹に罹らないために、また病中時における食品の記載がある。加筆部では、麻疹平癒の後とあり、時期の違いはあるものの、一貫して、食べてよい品・悪い品に関心があることがうかがえる。また、この加筆部の情報は、医師と思われる矢野玄英から入手していることが確認されるのである。

小結

中奈良村の名主野中家は、天保7・8年の麻疹流行時に、文政7年刊の板本「麻疹養生伝」を入手し麻疹対策の情報を得ていた。そして、野中氏の関心は、加筆による部分から、麻疹の流行の時期と、麻疹流行時の食べ物の選択にあったことがわかる。

また、文久2年の麻疹の流行の際には、麻疹絵を購入しなくても、所持していた「麻疹養生伝」により麻疹対策を立てることが可能であった。

3　鈴木(庸)家文書にみられる情報の伝播

鈴木（庸）家は、武蔵国比企郡宮前村（現. 比企郡川島町宮前）の名主役を勤めた家であった。文久2(1862)年時は、庸寿（当時51歳）が名主役を勤めており、嘉永6（1853)～7年のペリー来航の際には、領主である川越藩の相州沿岸警備に伴い人馬の差配などを命じられていた[16]。

この鈴木（庸）家文書のなかの御用留[17]から、文久2年に麻疹が流行した際、麻疹の心得を記した摺物（墨摺単色・一紙）を村名主が特注して作らせている事例を確認できた。まず、その資料を示そう。

以手紙啓上仕候、時下残暑之砌御座候処愈御清勤奉泰賀候、然は此節上一般麻疹病被流行之処、中ニは仮初之事ニ心得不養生いたし終ニは一命ニもおよひ候者も不少由、依之御府内名家之医師江承り候処養生有増認メ被遣候間、自分計心得居候も不本意ニ付、せめてハ当堤内村々たけも告しらせ度存、別紙之通養生心得書摺物ニいたし差上候間、何共御手数ニは存候得共、片時も早く御組合御村々小前之衆迄御行届ニ相成候様御配慮奉願上候、尤夫々御手抜も有之間敷候得共、存付候事故不顧失敬奉申上候、何卒可然様御取計之程偏奉希候、以上
　　七月廿三日　　田中三左衛門
鈴木久兵衛様
右之通、三保谷宿名主三左衛門心付を以申越候ニ付、早々、上狢村・平沼村・中山村・白井沼村・紫竹村・当村、六ケ村江摺物配分いたし候

この資料から、明らかにしておきたいことは、以下の4点である。三保谷村（現. 比企郡川島町三保谷宿）の名主が江戸において医師から麻疹養生の心得についての情報を入手したこと。その情報を自分だけのものとせず、組合村々の小前百姓にまで伝えることを望んでいたこと。そして、その手段として、医師から聞いた養生の心得を摺物として配布したこと。その摺物は市販されていたものではなく、注文して作らせたものであることである。

それでは、オーダーメイドした摺物はいかなるものであったのか紹介しよう（写真8）[18]。

写真8　はしか病者養生心得

はしか病者養生心得
　　大きんもつ
魚るい　鳥るい　ひや水　酒のるい
海草るい　貝るい　いもるい　うりのるい
かしるい　さとう類　なのるい　なめものるい
しんつけ類　つみ草るい　ねぎの類　せりのるい
ゆば　ほうれん草　なすび　ぶどう
むかご　大豆　ほしのり　とうなす
ゑんどう豆　ぬかみそづけ　くり　もろこし

わらび すいか こんにやく いだまめ
かき 竹の子 はすの根 とうふ
しゐたけ わさび らつきやう なし
ところてん くだもの類 ふき うど
茶　ゆ水にて顔手足等あらう事無用
右の外第一おそるべきハ男女交合　ねびき　夜あるき　うす着　うなぎ　なまず　どぜう　めんるい　あぶらけ　灸治　もちるい　梅ぼし　惣してすきものからきもの等者七十五日、やまひおもき者百日いむべし、入湯さかやきハ五十日いむべし
此外にもうたかわしきものハ其所のいしやにたづねて、かりそめにも不養生いたすべからす、人命にかゝわるの大事、かたく慎むべし　○きびとうもろこしハ三年いむべし
　○たべてよきもの
たくあんつけ しら玉 かつほぶし みそづけ
くろまめ かんひやう とうがん いんげん
さつまいも くわゐ むぎめし あづき
あめ 道明寺 しんこもち やきふ
長いも にんじん 大こん かぶ
はにんじん でんぶ ゆり しゞミ汁
かれい あわび ほうぼう 但魚類ハなるたけやきしほにて米かゆを用ひてよし
　文久二壬戌年七月

このように記載されている内容は、順に、①食べてはいけない食物、②慎むべき行為、③食べてよい食物である。作成された７月は、麻疹絵が多量に作成された時期である。そして、上記の内容については、麻疹絵に記されていることである。また、摺物には、発注者の名前や板元名が記載されていない。

なぜ、麻疹絵を購入せずに、刷物を作らせたのかはわからない。金額の点からすると、麻疹絵の販売価格を示した文献等を確認していないが、おそらく１枚16文（現在の貨幣価値に直すと240から300円）程度であったと思われる。一方、摺物の作成費用がいくらであったのか確認できる資料はない。しかし、もし摺物の配布が六か村の小前百姓一軒宛であったならば、摺物を注文作成しても、麻疹絵を家数分購入するよりは安価であっただろう。

この摺物に記載されている内容は、市販されていた麻疹絵に盛り込まれた内容に大差はない。しかし、この摺物から、伝えたい内容、そして知りたい内容が明らかとなる。

小結

文久２年の麻疹流行時には、江戸の板元が販売した木版多色刷りの麻疹絵のほか、依頼をうけて作成した墨摺一枚物の摺物も作られていた。

この摺物には、伝えたい情報、つまり受け手が知りたい情報として、食べてはいけない物、慎むべき行為、食してよい物が記載されていた。食べては行けない物や慎むべき行為の情報が、食べてよい物よりも先に記されていることに、伝えたい、また知りたい情報の優先順位が伺われる。他方、薬についての情報や麻疹よけの呪い、麻疹の流行した時期などは記載されていなかった。

この注文作成した摺物の例から、当時の人々が、切実に必要と考えていた情報と、そうでない情報の内容が峻別されると断定できる。

4　文久２(1862)年の麻疹絵について

最後に、小室家が入手した麻疹絵に、どのような特色が見られるのか検討しておきたい。このため、文久２年に作成された麻疹絵の全体像をまず示し、この中で、小室家に残された麻疹絵の特色を探ってみたい。表１を参照されたい。ここには、現在確認される文久２年の麻疹絵91点と、摺物の抄録として10点、同時期に作られてコレラに関する浮世絵４点を掲げた。作表にあたり、検閲の改め月による区分をした後、絵師ごとに配列し、同一絵師が複数の作品を作成している場合は板元による括りをして列べたものである。そして、板本の「麻疹養生伝」と「麻疹必用」に記された内容がどのように反映されているのかを確認するため、ＡからＫの項目に情報を分けてそれぞれの分布をみたものである。

まず、４月に検閲を受けた麻疹絵35点についてみてみよう。この時の麻疹絵は、豊国系の絵師・房種が２枚、国周が１枚、貞秀が２枚（小計５枚）、国芳系の絵師・芳虎が９枚、芳盛が３枚、芳艶が４枚、芳藤が１枚、芳幾が１枚、芳豊が３枚、芳宗が３枚、芳年が１枚、芳勝が１枚、芳員が２枚（小計28枚）、その他の絵師・了古が２枚を作成している。

この表から同一の板元から発売された、NO. ４とNO. ５では情報が重複せず、このことから先の２枚を入手することにより、先に取り上げた板本「麻疹養生伝」に示された11項目の内７項目を入手することが出来たことがわかる。ここに売り手側である板元の商魂を垣間見ることができる。なお、この２枚

表１　文政７(1824) 年正月刊の重田貞一（十返舎一九）著「麻疹養生伝」・同年正月刊の葛飾廬庵著「麻疹必用」が文久２年(1862)年４月から７月に検閲を受けて刊行された麻疹絵や摺物に与えた影響について

2001年11月01現在

【凡例】　「麻疹養生伝」に記載された内容

A：（予防情報）鍾馗（麻疹よけの神として）
B：麻疹之来由（麻疹が大陸からもたらされたこと）
C：（介護情報）養生の方法
D：（予防情報）食してよろしきもの
E：（予防情報）食してあしきもの
F：（予防情報）慎むべき行為
G：（予防情報）麻疹まじない事（馬屋の盥）。これ以外の麻疹よけのまじないが記載されている場合は、＊印
H：（予防情報）三文字の呪文字の札（麻疹よけとして）
I：麻疹年数大概（はしか流行の歴史）
J：（医療情報）麻疹薬方（薬の調合）
K：麻疹の前兆および一度かかれば二度は罹らない

◎：「麻疹養生伝」と「麻疹必用」の双方に記された内容
○：「麻疹養生伝」のみに記された内容
●：「麻疹必用」のみに記された内容

	no	作品名	絵師名	板元名	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	備考(画題・異版など)	掲載印印刷物
		（１）【４月に検閲を受けた麻疹絵】															
			【豊国系】														
①	**1**	**＋麻疹軽くする法**［2枚続］ 3	房種	木屋宗次郎					◎	◎	●					（たらようの葉の呪）	町98、医128、内40
④	2	麻疹呪之図19	房種	駿河屋作次郎					◎	◎	●					（たらようの葉の呪）	町105、医144、内34
①	3	麻疹元服図［2枚続］26	国周	魚屋栄吉							●					（たらようの葉の呪）	町141、医150、内39
①	**4**	**麻疹養生伝**56	貞秀	大黒屋平吉				◎				○	◎			（養生図）	町20 、医147、内60
①	**5**	**疱瘡・麻疹・水痘**81	貞秀	大黒屋平吉			◎		◎	◎					◎	（養生図）	町116、錦71、内15
			【国芳系】														
⑥	6	麻疹養生伝70	芳虎	丸屋鉄次郎		○		◎	◎	◎		○	◎		◎	（お札を配る図）	町90、医126
①	7	麻疹養生記72	芳虎	丸屋鉄次郎			◎	◎	◎	◎			◎		◎	（養生図）	町114、医130、内61
④	8	麻疹養生辨78	芳虎	丸屋鉄次郎				◎	◎	◎	○					（麦の穂・たらよう葉）	町19
②	9	麻疹養生之伝65	芳虎	大黒屋平吉	○		◎	◎	◎	◎						（鍾馗に祈る人）	医116、錦74
①	10	麻疹養生心得35	芳虎	大黒屋平吉			◎		◎	◎					◎	（為朝の神・養生図）	医125、内64
④	11	麻疹養生之伝１	芳虎	佐野屋富五郎						◎	○		◎			（馬屋盥・たらよう葉）	町107、医145、内73
①	12	麻疹養生之伝36	芳虎	佐野屋富五郎			◎	◎	◎	◎					◎	（養生図・素盞烏尊）	町82、医125、内68
①	13	麻疹養生弁21	芳虎	遠州屋彦兵衛	○			◎	◎	◎						（養生図・鍾馗）	町78、内63
⑥	14	流行けん之図（湯屋・女郎・医者）34	芳虎	伊勢屋兼吉												（拳絵・３者境遇）	町127、医124、内49
⑥	15	毒だてやうじやう14	芳盛	太田屋多吉				◎	◎	◎	＊					（打擲図）	町22、内38
②	16	麦殿大明神12	芳盛	太田屋多吉				◎	◎	◎						（麦殿明神に祈る人）	町13、医121
③	17	むぎどのハ生れぬさきにはしかして37	芳盛	古賀屋勝五郎							●					（打擲図）	町108、医127、内30
④	18	はしかのまじなひたらようの葉15	芳艶	（口に大）							●					（麦の穂・たらよう葉）	町102、医122、内37
③	19	開運麻疹疫病神除之伝55	芳艶	（口に大）				◎	◎	◎	＊					（詫証文に手形押図）	町11
④	20	はしかのまもり30	芳艶	辻岡屋文助		○					●					（麦の穂・たらよう葉）	町18、医116、内32
④	21	麻疹飲物養性75	芳艶	海老屋林之助				◎	◎		●					【文字部分削除版有】	町103
②	22	麻疹禁忌・同宜品29	芳藤	（相ト）	○		◎	◎	◎	◎						（はしかよけの神）	町12、医115、内74
④	23	はしかよけ68	芳幾	越村屋平助						＊						（はしかよけの守札）	医112、戯171、内35
③	24	麻疹まじなひの辨71	芳豊	菊屋市兵衛						＊						（鉄牛和尚の打擲図）	町88、医127、内36
④	25	麻疹養生辨62	芳豊	菊屋市兵衛				◎	◎	◎				◎		（素盞烏尊の図）	町84
①	26	麻疹手当奇法辨４	芳豊	山本久兵衛				◎	◎	◎				◎		（医者による治療図）	町112、医146
④	27	麻疹を軽くする伝17	芳宗	糸屋庄兵衛			◎	◎	◎	◎	○				◎	（馬屋の盥をかぶる）	町106、医121、内71
②	28	麻疹流行年数２	芳宗	糸屋庄兵衛							○		◎			（素盞烏尊に祈る図）	町83、医123、内81
⑥	29	はしかの養生44	芳宗	糸屋庄兵衛				◎								（相撲取り組み図）	町95、内59
④	30	出雲国麻疹除御神28	芳年	遠州屋彦兵衛				◎	◎	◎	＊					（素盞烏尊の図）	町10、医115、内41
④	31	はしかましなひの歌18	芳勝	濃州屋安兵衛							●					（たらようの葉など）	町104、医144、内33
②	32	麻疹除神法 49	芳員	（鍵重）							＊					【33と同画・異文字】	町80
②	33	麻疹養生禁物79	芳員	（鍵重）				◎	◎	◎						（素盞烏尊に祈る人）	町81、内72
			【その他】														
⑥	34	為御覧(よろしき方・きんもつ方)41	了古	遠州屋彦兵衛				◎	◎							（見立番付・取組図）	町121、医134、内76
④	35	麻疹まじなひ52	了古	伊勢屋庄之助							＊					（素盞烏尊の図）	く
		（小計　３５点）			3	2	7	19	21	20	20	2	5	2	6		

	36	（２）【６月に検閲を受けた麻疹絵】 ［此節世上もつはら麻疹……］［2枚続］	【国芳系】 芳虎															古書店目録
		（小計　１点）																
		（３）【７月に検閲を受けた麻疹絵】																
			【豊国系】															
①	**37**	**麻疹養生之おしえ**58	房種	木屋宗次郎			◎	◎	◎	◎					◎	（養生図）	町115、医129
②	38	麻疹心得之図画66	房種	木屋宗次郎				◎	◎	◎					◎	（麻疹送りの図）	町100、医119、内69
⑤	39	麻疹護調延寿鑑［2枚続］47	国周					◎	◎	◎					◎	（見立番付・役者絵）	町118、錦72 、内67
①	40	沢村田之助　麻疹養生之事38	国周	清水屋直次郎				◎	◎	◎						【70と同文章・異画】	町142、医131
			【国芳系】														
①	**41**	**麻疹養生心得方**	芳虎	佐野屋富五郎			◎	◎	◎	◎				◎	◎	（発疹顔図）	小室家6369-1
③	42	麻疹後の養生25	芳虎	佐野屋富五郎											◎	（打擲図）	町77、医118、内95
⑥	43	道外三人上戸73	芳虎	伊勢屋兼吉												（三人生酔・３者境遇）	町128、医136
⑥	44	麻疹全快祝の酒盛27	芳虎	伊勢屋兼吉												（快気祝いの酒盛り）	町131、医134、内52
⑤	45	食して宜品大概麻疹禁忌荒増［2枚続］57	芳虎				◎	◎	◎	◎			◎		◎	（食べて良品・悪品）	町137、医132、内75
③	46	諸人麻疹退治之図９	芳盛	太田屋多吉												（打擲図・素盞烏尊）	町17、医147
①	47	流行麻疹十二日の間養生の事40	芳盛	太田屋多吉			◎	◎	◎	◎					◎	（治療する医者）	町111、医133
⑥	48	流行端唄のかへ唄83	芳盛	太田屋多吉												（儲けた人の酒盛り）	町130、内53
②	49	流行麻疹退散の図10	芳盛	古賀屋勝五郎				◎		◎						（神に祈る人々）	町85、医126、内58
③	50	食してよろしきもの（譜賁図）	芳盛	古賀屋勝五郎				◎								【51と同文字・異画】	町96
①	51	食してよろしきもの（嘔吐図）50	芳盛	古賀屋勝五郎				◎								【50と同文字・異画】	町136、内65
⑥	52	麻疹病中食物辨43	芳盛	魚屋栄吉				◎	◎	◎						（三人生酔・３者境遇）	町135、内70
②	53	麻疹病後養生辨64	芳艶	海老屋林之助		○	◎									（弘法大師図）	町87
⑥	54	流行はしかけん	芳艶	海老屋林之助												（拳絵による世相）	古書店目録
⑥	55	流行麻疹けん42	芳艶	亀屋岩吉				◎	◎							【改印無も有】（拳絵）	町126、医136、内50
①	56	麻疹手当之事67	芳艶	近江屋久助				◎		◎				◎		（麦の穂・養生図）	医120
⑥	57	妙医甲斐徳本麻疹之来記［2枚続］53	芳藤	（相ト）				◎		◎			◎			（麻疹講釈・素盞烏尊）	町86、医117、内85
①	58	麻疹心得草60	芳藤	（相ト）			◎	◎	◎	◎					◎	（養生図）	町109、医151
⑥	59	百人首内麻疹三十六歌仙74	芳藤	（相ト）												（３者境遇）	医137
③	60	麻疹退治５	芳藤	湊屋小兵衛				◎	◎	◎						（打擲図）	町14、医129、内44
②	61	麻疹送出シの図８	芳藤	湊屋小兵衛				◎	◎	◎						（麻疹送りの図）	町15、医146、内55
⑥	**62**	**はしか童子退治図**７	芳藤	越村屋平助				◎	◎	◎						（麻疹捕図・素盞烏図）	町16
⑥	63	麻疹退治戯の図51	芳藤	太田屋多吉				◎								（打擲図）	く
①	64	麻疹養生草80	芳幾	上州屋金蔵				◎	◎							【65と対】（養生図）	町113
①	65	麻疹養生草22	芳幾	上州屋金蔵					◎	◎						【64と対】（養生図）	古書店目録
③	66	はしか養生草32	芳幾	近江屋久助				◎	◎	◎						（打擲図）	町94、医119、内56
⑥	67	むかしはなし23	芳幾	近江屋久助							●					（首引きによる世相）	町133、戯171
②	68	麻疹病中食物辨16	芳幾	広岡屋幸助				◎	◎	◎						（素盞烏神に祈る人）	町79
③	69	三気男はしかたいぢ［2枚続］11	芳幾	太田屋多吉												（見立役者絵）	町91、医149、内45
①	70	沢村田之助全快　麻疹養生之事20	芳宗	清水屋直次郎				◎	◎	◎						（役者絵）	町143、錦
①	71	流行麻疹七十五日数早見77	芳年	遠州屋彦兵衛												（養生図）	町117
⑥	72	柳風狂句24	芳年	遠州屋彦兵衛												（酒盛り図）	町132
①	73	麻疹全快御目得口上76	芳年	濃州屋安兵衛												（見立歌舞伎絵）	歴H22-1-10-14
⑤	74	麻疹ニ禁物品々・麻疹よろしき物61	芳勝					◎	◎	◎						（食べて良品・悪品）	町124
③	75	麻疹養生集［2枚続］39	芳員	万屋吉兵衛				◎	◎							【コレラ絵板木流用】	医131、内62
⑥	**76**	**麻疹厄はらひ**85	艶政						◎							（厄払を借りて世相）	内57
			【その他】														
⑥	77	はしか落しばなし６	了古	伊勢屋庄之助												（打擲図）（世相）	内48
⑥	78	道行旅路花聟84	了古	伊勢屋庄之助												（見立歌舞伎絵）	町97、医137、内48
		（小計４２点）			0	1	6	25	21	20	1	0	2	2	8		

	（４）【改印あるも月不詳の麻疹絵】															
79	身の元厳重太夫山上強気性［2枚続］	【国芳系】 芳艶	近江屋久助												（見立歌舞伎絵）	古書店目録
80	道戯手遊合戦［3枚続］	芳豊	辻岡屋文助												（合戦図）	古書店目録
	（小計　２点）															
	（５）【改印なしの麻疹絵】															
81	為麻疹（あたりの方・はづれの方）31	【国芳系】 芳盛													（見立番付・３者境遇）	町120、医152、内78
82	麻疹見立高金附46	芳盛													（見立番付）	町122、内77
83	おあひだが寄合人となる48	芳盛													（寄せ絵）	町23
84	はしかまじないおしへ宝13	芳艶	正文堂							○					（３者境遇）	町101、医120、内31
85	麻疹養生伝54	芳藤				◎	◎	◎						◎	（拳絵・三者境遇）	町99
86	はしかの毒合戦［2枚続	【広重系】 広重					◎	◎							（たべてよい品悪い品の合戦図）	町140
87	麻疹除并養生の伝63	【不詳】				◎	◎	◎	◎	●		◎			（手形図）	町89
88	大津ゑぶし33														（大津絵節で世相）	町125、医123
89	はやるはしかも今日翌ばかり69					◎									（唄による世相）	町129、医124
90	当世雑語麻疹合戦記［3枚続］59														（合戦図）	町138、内51
91	為麻疹														（見立番付）	医130、内46
	（小計１１点）			0	0	3	3	3	1	2	0	1	0	1		
	（６）【摺物】（抄録）															
1	為麻疹（　のかた・●のかた）														（見立番付）	町123、医153
2	為麻疹（はんじょう・おあいだ）														（見立番付）	医153
3	呪たらやうのは（もうけ・おあいだ）										○				（見立番付）	町149
4	麻疹能毒養生辨(食してよろしき物･あしき物)						◎	◎	◎	●			◎		（見立番付）	内80
5	麩瘡家														（見立武鑑）	か
6	麻疹養生子孫心得鏡					◎	◎	◎	◎		○	◎			（たらよう薬･馬屋盥）	内147
7	流行はしか戯一口噺（文久2年6月）														（噺による世相）	町145
8	麻疹手あての事（文久2年6月）		社倉育嬰構				◎	◎					◎			内83
9	麻疹禁忌（文久2年夏		山本屋勘太郎					◎	◎						（引札か）	内82
10	はしか病者養生心得（文久2年7月）						◎	◎	◎						（村名主の注文製作）	鈴木（庸）9
	（小計１０点）			0	0	1	4	5	4	1	2	2	2	0		
	（７）【同時期に作られたコレラ絵】															
1	かけ合権八長兵衛［2枚続］（文久2年7月	芳幾	伊勢屋庄之助												（見立歌舞伎絵）	
2	流行金時ころりを除る法（文久2年７月）	芳勝	濃州屋安兵衛												（打擲図）	町154、医169、内88
3	由縁の友戌の見舞（文久元年11月）	芳盛	太田屋多吉												（病気見舞図）	医135、内87
4	犬のはなし（文久元年10月）	芳年	正文堂												（病気治療図）	医135
	（小計　４点）															
	（合計 錦絵９５点／かわら版１０点）			3	3	17	51	50	45	24	4	10	6	15		

【注】作品名の後に判形の記載のないものは、大判錦絵である。また、作品欄の中の数字は富沢達三氏の報告における資料番号である。

【典拠】　町：畠山 豊企画『（展示図録）錦絵に見る病と祈り　疱瘡・麻疹・虎列刺』（1996年・町田市立博物館）所収の掲載資料番号
医：日本医史学会編『図録　日本医事文化史料集成　第四巻』（1978年・三一書房）所収ページ
内：伊藤恭子編『くすり博物館収蔵資料集④　はやり病の錦絵』（2001年・内藤記念くすり博物館）所収の掲載番号

か：中山栄之輔『江戸明治かわらばん選集』（1974年・柏書房）所収資料番号
歴：『（収蔵資料目録）』（199 年・国立歴史民俗博物館）所収の資料番号
く：『（展示図録）浮世絵に見る江戸の子ども達』（2001年・くもん研究所）所収の掲載番号

は、小室氏も入手していた。NO.32と33は、同一の板元から売り出されたもので、文字の板木は別であるが絵の板木は同じ物を使いまわしていることがわかる。また、NO.75のように、文字の板木の一部が削られて再版された作品も確認できる。なお、NO.7のように、4月改めの作品であるのに、本文中に「一 文久二年五月はやる」という記載のある作品があることにも注意を払っておきたい。

この麻疹絵35点に盛り込まれた文字情報に関して、頻度の高い順に示すと、E食してあしきもの(21点)、F慎むべき行為(20点)、G各種の麻疹に対する呪い(20点)、D食してよろしきもの(19点)、C養生の方法(7点)、K麻疹の前兆および二度と発病しないこと(6点)、I麻疹が流行した時期(5点)、A麻疹よけの神としての鍾馗(3点)、J麻疹に対する薬方(2点)、H三文字の呪文字(2点)、B麻疹が大陸からもたらされた来由(2点)となる。

GとHの呪い行為を足すと22点となる。そしてNO.13・19・30・31・35は、文中にこの絵を家に貼り置けば、麻疹よけになる・麻疹に罹っても症状が軽いと明記されており、厄よけ札の効力があるとしている。食物については、DとEを足すと40件となる。この時期、情報として多く発信された内容は、食べ物の峻別、麻疹よけの呪いについて、麻疹流行時の慎むべき行為の3点といってよいと思われる。さらに、ここでは食べ物の峻別について、食べて悪い物が、食べて良い物よりも頻度が高いことにも注目しておきたい。

次に、絵画情報について考察しておこう。

この絵画の内容分類についての考察は、南氏や富沢氏が既に行っているので、今回はその手法を借用するに留めておく(ただし、評価の違いは言及する)。

モチーフは、大きくわけて、①養生図・治療図・病状図、②守護神などに祈願する図、③麻疹を退治する・麻疹がわびる図など、④厄よけの呪いを描いたもの、⑤食べてよい品・悪い品を描いたもの、⑥世相を描いたものの5つに分類した。35点の麻疹絵は、それぞれ9点、6点、3点、12点、0点、5点であり、麻疹よけの呪いを描いた絵(12点)や養生図(9点)が多く、退治図(3点)が少ないことがわかる。

それでは、次に、7月に検閲を受けた麻疹絵42点についてみてみよう。この時の麻疹絵は、豊国系の絵師・房種が2枚、国周が2枚、(小計4枚)、国芳系の絵師・芳虎が5枚、芳盛が7枚、芳艶が4枚、芳藤が7枚、芳幾が6枚、芳宗が1枚、芳年が3枚、芳勝が1枚、芳員が1枚、艶政が1枚(小計36枚)、その他の絵師・了古が2枚を作成している。

まず、4月改めの作品よりも多く作成されていることがいえる。もし4月に検閲を受けた麻疹絵も再版されていたとすると、4月時の倍の作品が販売されていたことになる。

NO.40と71は、絵師は国周と芳年であり、絵柄も異なるが、同じ板元で作成されたため、文章は同じである。NO.50と51は、同一絵師・同一板元の作品であり、絵柄は異なるが、文字板は同じ板木を使用している。NO.64と65は、同一絵師・同一板元の作品で、2枚は対になっており、2枚を入手すると食べてよい品・悪い品・慎むべき行為の3情報を入手することができた。NO.55は拳絵の手法により世相風刺を行っている作品であるが、改印のある物とない物の2種類が存在する。NO.75は、嘉永元(1848)から嘉永5年の間に作成された国芳画「(疱瘡絵・鎮西八郎為朝と疱瘡神)」(板元は万屋)の板木を流用している。板木は右面は芳員により全面的に作りかえられているが、左面の源為朝の絵は元板を使用している。その上で、文字板を付け加えて、右面に「食してよろしき品」、左面に「食してあしき品」の情報を盛り込んでいる。

麻疹絵42点に盛り込まれた文字情報に関して、頻度の高い順に示すと、D食してよろしきもの(25点)、E食してあしきもの(21点)、F慎むべき行為(20点)、K麻疹の前兆および二度とかからない(8点)、C麻疹養生の方法(6点)、J麻疹薬方(2点)、I麻疹の流行した時期(2点)、B麻疹が大陸からもたらされたこと(1点)、G麻疹よけ呪い(1点)であり、4月にみられたA麻疹よけの神としての鍾馗と、H三文字の呪文字の情報がなくなっている。

4月の作品と情報内容の相違をみると、呪いに関する項目が激減していることがわかる。NO.42には呪いについての記載があるが、これはコレラよけの呪いである(このため表には印を付していない)。ただ1点、NO.67に、描かれた衝立の図中に麻疹よけの呪いの呪文が記載されているのみである。しかし、これも4月に検閲を受けた麻疹絵と異なり、麻疹よけの呪いであるとの解説が付け加えられているものではない。このことと、AとHの項目の情報が

なくなったことを考え合わせると、板元は呪術的な要素をはしか絵に盛り込まなくなったと断定してよい。その理由は、呪い札の効力がなかったことが実体験を通して露呈したことにより、購入者の信用を失わないために、言い換えると麻疹絵に対する購買意欲を落とさないようにするために、記載しなくなったものと推察される。このように、麻疹が４月に流行しはじめ、７月に至るまでの実体験や見聞を通して、板元は発信する情報を修正・選択していたのである。

次に、絵画情報についてみておこう。

７月検閲麻疹絵42点の画像について、多い順にならべると、⑥世相を描いたもの(15点)、①養生する図・治療図・病状図（12点)、③麻疹を打擲退治する・麻疹がわびる図など（７点)、②守護神などに祈願する図（５点)、⑤食べてよい品・悪い品を描いたもの（３点）となり、４月に検閲を受けた麻疹絵にみられた④厄よけの呪いを描いた作品はない。

世相を描いた絵が増えたのは、７月までの世情情報が蓄積されたことによるものであろう。また、麻疹を打擲する図が増えるが、この麻疹絵は、人々の願望を代弁したもの、また世相を風刺した風刺画であることは、小室氏に残された「はしか童子退治図」を一例として先に明らかにしたところである。つまり、この打擲図は、呪い札、つまり呪術的な作品であるとはいえないのである。前近代の作品であることを理由に、安易に呪術性を語ってはならない。

繰り返しになるが、麻疹絵の４月改めの作品の中で、厄よけ札と称した作品も確かに売られていたが、経験的裏付けにより効力がなかったことが明らかになってしまったことから、情報が淘汰され、７月には呪い札の機能を持つ麻疹絵は作成されなかったと私は考えている。以上のように、４月に検閲を受けた作品と７月に検閲を受けた作品とでは相違があることを確認することができる。

次に、摺物には、どのような情報が記載されていたのかみておこう。情報の多い順に列べると、Ｅ食してあしきもの(５点)、Ｆ慎むべき行為(４点)、Ｄ食してよろしきもの（４点)、Ｊ麻疹薬方（２点)、Ｈ三文字の呪い文字（２点)、Ｇ麻疹よけの呪い（１点)、Ｉ麻疹が流行した時期（２点)、Ｃ養生の方法（１点）であった。摺物でも、食品の選別と慎むべき行為といった実用的な情報が多く記載されていたことが確認できる。

最後に、文久２年につくられた麻疹絵と摺物（板本は除く）(101点）に記載された情報について、頻度の高い順に列べると、Ｄ食してよろしきもの（51点)、Ｅ食してあしきもの（50点)、Ｆ慎むべき行為(45点)、Ｇ麻疹よけの呪い（24点)、Ｃ養生の方法(17点)、Ｋ麻疹の前兆および二度と発病しない（15点)、Ｉ麻疹の流行した時期(10点)、Ｊ麻疹薬方（６点)、Ｈ三文字の呪い文字（４点)、Ａ麻疹よけの神としての鍾馗（３点)、Ｂ麻疹が大陸からもたらされたこと（３点）となる。

小結

文久２年につくられた麻疹絵に記された情報は、食物や慎むべき行為、そして養生の方法といった実用的な情報が他の項目と比較して圧倒的に多く記載されていた。また、麻疹よけの呪いについての情報も多く示されてはいるが、それは４月に検閲を受けた作品に限定される。このことは７月に検閲を受ける作品が作成されるまでに４月の麻疹絵に示された呪いに効力がなかったことを確認したことによる。

以上、麻疹絵の全体像を明らかにしてきたが、医師の小室家が入手した麻疹絵７点を位置づけるならば、食物や養生方法などを記した実用的なもの５点、実用的な情報を含んだ世相画１点（「麻疹厄はらひ」)、麻疹流行が止むことを願望する絵１点(「はしか童子退治図」）であり、出回っていた麻疹絵のそれぞれの比率と比較すると、実用的な作品の比率が高いということになる。特に、薬の調合をも記した「麻疹養生心得方」は、今のところ小室家蔵以外に確認されていないところに特色がある。

まとめにかえて

文久２年時につくられた麻疹絵や摺物において、伝えられた情報は食べ物の選別や慎むべき行為といった実用的な情報が多く盛り込まれていた。このことは、注文作成した摺物の事例から明らかにしたように、情報の受け手が欲しがっていた情報であった。また、はしか絵を販売した側では、受け手つまり、購入者の求めに応じて情報を提供していた。このことは、４月および７月に検閲を受けた麻疹絵を通じて、食べ物の選別や禁止行為についての情報に重きをおいていたことからこのことがいえる。また、７月に検閲を受けた麻疹絵に呪い情報が消えているように、体験的に確認したことに基づいて伝える内容を変えていった同時代性・事実客観性の強い

ものであることも見落としてはならない。しかし、速報性があったとは、私は評価しない。それは、食物の選択などの情報は過去の情報に依拠している、また４月の後に、毎月作成されていたのではなく、４月に作成された後は、麻疹流行のピークに達した７月に改めて販売された事実から判断している。

最後に、麻疹絵の位置づけを、麻疹流行時における麻疹にかかわる出版物の動向の視点と、「時事浮世絵」の動向の視点から押さえておきたい。

まず、麻疹に関わる出版物の動向をみてみよう。

表２　麻疹に関する板本の刊行一覧

刊行年	内容分類			合計
	医学薬物	咄本戯文	記録その他	
○宝暦３(1753)	2			2
明和８(1771)	1			1
○安永５(1776)	2			2
安永９(1780)	1			1
寛政８(1796)	1			1
寛政９(1797)	1			1
寛政10(1798)	1			1
寛政11(1799)	4			4
寛政12(1800)	2			2
○享和３(1803)	11	3	1	15
文化13(1816)	1			1
文政５(1822)	2			2
○文政７(1824)	10		1	11
○天保７(1836)				0
安政７(1860)	1			1
○文久２(1862)	7	2	1	10
合計	47	5	3	55

【典拠】『補訂版 国書総目録』(岩波書店・1995年) における「はしか」と「ましん」の項目より
【凡例】○印は、麻疹の流行した年を示す。

表２は、『国書総目録』に掲載されている出版物のうち刊行年のわかるものを抽出して作成したものである。この表から、麻疹の流行した時期に多くの板本が刊行されていたことが確認される。またここで、注目しておきたいことは、天保７年に麻疹が流行しているにも関わらず、この時に新作として出版されたものがないということ、文久２年時は、享和３年や文政７年時よりも新作の出版数が少ないということである。なお、享和３年・文政７年・天保７年の麻疹流行時には、見立番付を除き、今のところ錦絵仕立て（＝多色刷木版画）の麻疹絵は確認されない。このことから、文久２年以前は、麻疹に関する情報は板本から入手せざるを得なかったが、文久２年時は情報を提供するメディアとして麻疹絵が大きな役割を果たしたといえるのではなかろうか。

ただし、麻疹絵に盛り込まれた内容や水準は、過去に出版された板本を超えているものでなかったことも付け加えておかなければならない。

江戸において、疱瘡絵（＝赤絵）を除いて、病気が流行した際に「時事浮世絵」が作成されたのは、安政５（1858）年のコレラ流行時に刊行された「コレラ絵」を初出とする。

弘化４（1847）年２月の拳絵流行以降、「時事浮世絵」は、隆盛を極めるようになる。文字情報が多く記された「時事浮世絵」が作られるようになった理由は２つあった。ひとつは、板元の側にあった。天保の改革により、美人画・役者絵や豪華な浮世絵を作ることができなくなり、その穴埋めに他の分野の作品を作り利潤を確保しようとしたことにあった。また、購入者側は、浮世絵を美術品としてではなく、情報を得るための印刷媒体と考えていた。ペリーの来航以降、江戸市中は幕末維新の荒波に飲み込まれていく。このため庶民は、自分の暮らしを守るため、また単なる興味本位で情報を入手しようとする欲求が急激に拡大し、これに対応すべく、かわら版が数多く作られ、庶民もこぞってこれを買い求めた。この動向のなかで、情報を入手するための手段として「時事浮世絵」への需要が高まってきた。

そして、多量の文字情報が「時事浮世絵」に付けられたのは、拳絵が踊りの振り付けを絵と文字で示したスタイルが当たり、評判を呼んだことにあった。ただし、このスタイルの誕生は偶然生まれたものではなく、黄表紙のように絵中心の大衆小説があったという素地があった。浮世絵がメディアとして機能していたため、嘉永２（1849）年の江戸市中における流行仏の情報や安政２（1855）年の江戸大地震後の情報を伝える鯰絵が作成されたのである。この動向のなかで、文久２（1858）年の麻疹流行に際して、実用情報を盛り込んだ麻疹絵が作られたのであった。

【付記】

本稿は、当館の常設展示における近世文書の展示替え「江戸のマスメディアに幕末を読む　文久年間編　－皇女和宮の下向・麻疹の流行・将軍家茂の上洛・生麦事件の後遺症・渡来象の見せ物－」(2001年3月16日～7月6日)を実施する際に得られた知見をもとに、彩の国いきがい大学講演において「江戸のマスメディアに幕末(文久年間)を読む」(2001年10月25日)として報告、また関東近世史研究会大会において「天保以降メディアの特質とその流通」(2001年10月29日)として基調報告した一部をまとめたものである。同日の富沢氏の報告と内容が重なる部分もあるため、富沢氏のレジュメや報告で述べられたことについては、本稿の論旨が通じる範囲に留めている。このため、麻疹絵の持つ豊かな情報については富沢氏論文を参照して補完していただきたい。ただし、富沢氏から報告されなかった点でについては、全面的に本稿で知見を叙述した。

本稿作成にあたり、職場の同僚、高尾善希氏をはじめとする関東近世史研究会運営委員会の方々から多くの助言をいただいている。ここに謝意を示しておきたい。また、本稿の刊行を楽しみにされていた故宮田 登氏にささげたい。(2001年11月30日)

註

1)今日我々が浮世絵と呼称する作品は、江戸時代において、錦絵、また江戸で作られた作品は東錦絵と呼称されていた。このため、宮地正人氏は、錦絵というタームを用いている。私もこの意見に賛同する。しかし、浮世絵愛好家や学会において、今日、錦絵として括られる作品は、江戸時代の錦絵全てを指すものでなく、芸術性の低い風刺画やおもちゃ絵などに矮小化され、限定され使用されているのが現状である。このことから、私は、美人画・役者絵・風景　画等を含めた江戸時代の錦絵全てを示す言葉として、今日の学術用語である錦絵が認知・使用されるまで、問題を喚起する意味で、木版多色摺りの風刺世相画を含めた作品を浮世絵という言葉で表記表現する。一般認識が、錦絵イコール浮世絵となった時点で、私の書き物における表記を、浮世絵から錦絵へと改めたい。

2)拙稿「浮世絵を読み直す　－江戸っ子のマスメディアー」(『研究紀要』第22号・埼玉県立歴史資料館・2000年3月)を参照されたい。この後の成果として、竹内 誠「メディアとしての浮世絵」(国際浮世絵学会『浮世絵芸術』140・2001年)、宮地正人「明治維新の学び方　－風説書・摺物(瓦版)・錦絵を介して－」(『全国歴史教育研究協議会研究紀要』37号・2001年)などがある。

3)『幕末江戸の文化　浮世絵と風刺画』(塙書房・1998年)、『幕末の風刺画』(吉川弘文館・1999年)

4)註2記載の拙稿の注を参照。

5)詳細は、南 和男『幕末江戸の出版文化』参照。

6)「文久の「はしか絵」と江戸の世相」(『日本歴史』512号・1991年)

7)『疱瘡神　江戸時代の病いをめぐる民間信仰の研究』(岩波書店・1995年)

8)「疱瘡・麻疹にみる病観　－疱瘡絵と麻疹絵の比較」(『近畿民俗142号・143号・1995年)

9)註2記載の拙稿参照。及び拙稿「幕末浮世絵における鯰絵の系譜とその位置づけ」(『(展示図録)鯰』滋賀県立琵琶湖博物館・2001年7月)

10)「麻疹絵の情報世界」(平成13年度関東近世史研究会大会報告・2001年10月29日)『関東近世史研究』52号(2002年6月刊行予定)

11)日本医史学会編『図録日本医事文化史料集成第4巻』(三一書房・1978年)・畠山 豊企画『(展示図録)錦絵に見る病と祈り』(町田市立博物館・1996年)・伊藤恭子編『くすりの博物館収蔵資料集④　はやり病の錦絵』(内藤記念くすり博物館・2001年)

12)『小室家文書目録』(埼玉県立文書館・1997年)所収の解説

13)順に、小室家(埼玉県立文書館寄託)文書NO.6369-5、同-3、同-2、同-4、同-1、同-7、同-6。

14)小室家文書NO.3774(縦15.2cm×横8.9cm)。板元は、京都の勝村治右衛門・植村藤右衛門と、大坂の秋田屋太右衛門と、江戸の須原屋佐助・須原屋伊八・須原屋茂兵衛。

15)野中家(埼玉県立文書館寄託)文書NO.3275(縦16.5cm×横9.1cm)。板元は、江戸書林の蔦屋重三郎・鶴屋喜右衛門・鶴屋金助。天保8年入手としたのは、裏表紙見返し等における後筆書きから推定。

16)『鈴木(庸)家文書目録』(埼玉県立文書館・1996年)所収の解説

17)鈴木(庸)(埼玉県立文書館寄託)家NO.9「御用留(万延3～文久2)」。なお、本資料は、『川島町　史資料編近世2　幕末編』(川島町・1999年)として翻刻刊行化されている。

18)鈴木(庸)家NO.9所収(縦24.4cm×横33.4cm)
この資料は、上記資料集には掲載されていない。